

サステナブル社会を 目指すさまざまな業界の動き

取材・文／伊藤敬太郎 イラスト／桔川 伸

アップサイクル、サステナブルフードetc. 業界ごとに取組が広がっている！

SDGsが国を越えた共通の目標になっているように、サステナブル（持続可能）な社会づくりは、現代を生きる私たちにとって大きなテーマとなっている。地球環境や世界中の人々がこれからもサステナブルであるために、各業界では具体的にどのような取組が行われているのだろうか。



「アップサイクル」は、廃棄物に新たなアイデアやデザインを加えてより魅力的な製品を作り出すことを意味する。ファッション業界でも廃棄された古着を利用して新たな服を作る取組が進んでいる。



土壌・水質汚染に配慮された有機農産物、環境負荷が大きい肉類に代わる大豆ミート、途上国から搾取しないフェアトレードで取引された認証コーヒーなどがサステナブルフードの代表例。



再生可能エネルギーの街全体での効率的利用、CO₂削減に配慮した交通システム、ゴミの再利用システム、健全に資源が循環する自然環境などを取り入れたサステナブルな街づくりも進んでいる。



金融の分野では、売上げだけでなく、環境・社会・ガバナンス（健全な管理体制）を重視したESG投資が活発化。環境問題や労働問題などに配慮したサステナブル経営に取り組む企業が増えている。



世界中の誰もが幸せに暮らせる社会を目指して

環境を犠牲にした開発を続けていけば地球はいつか疲弊してしまう。開発途上国の人々からの搾取で成り立つような経済システムはいつまでも続かない。この問題に気づいた世界は、みんなが幸せに暮らすことができる「サステナブル社会」を目指して大きく変わろうとしている！



代表例は、プラスチックゴミ削減につながるエコバッグや木製ストロー、容器の削減につながるマイボトルなど。環境負荷の低減に加えて、デザインも優れた魅力的な商品が増えている。



サステナブル素材とは、オーガニックコットンなどの廃棄後は土に還る天然素材やリサイクル素材のこと。最近では、パイナップルの葉、サボテン、キノコの菌から服や靴を作る動きも進んでいる。



EUは2035年以降、ガソリン車、ハイブリッド車の販売を禁止することを表明。今後は世界的にEV車（電気自動車）への移行が進んでいく。日本の自動車産業も大きく転換していくことになる。



CO₂排出量削減のためには太陽光発電、風力発電、地熱発電などの再生可能エネルギーの割合を増やしていくことが重要課題。効率的な電力供給システム（スマートグリッド）の開発も必須だ。

ビジネス事例

「まちのコイン」で地域に人と人とのつながりを生み出す

地域に良いことをするともらえるコイン

「まちのコイン」は、面白法人カヤックが提供するコミュニティ通貨。地域とつながったり、地域のことを知ったり、地域の人と関わったり、地域に良いことをしたりすることで、加盟スポットで使えるコインがスマホアプリ上でもらえるというユニークで新しいサービスだ。

基本的には地域単位で導入されており、サービスに参加しているお店などの「スポット」でコインをもらったり使ったりする。利用する側はスマホアプリがあればOK。コインのもらい方や使い方は、地域やスポットが自由に決めることができる。例えば、ゴミ拾いに参加したり、カフェにマイボトル持参で訪れたり、食堂で出された食事を残さずに食べたりするとコインがもらえる。貯めたコインは、農家で出た規格外の野菜や地元のシャツ工場で

出る端切れなど「もったいないもの」を購入したり、ユニークなところでは、地元のミュージシャンのライブ演奏の際に歌詞に自分の名前を入れてもらったりといったことに使うことができる。このように楽しみながら自分が住む街の環境や資源の問題などに目を向けることができる特徴が目立っており、2022年3月現在、神奈川県鎌倉市など全国15の地域が導入している。

ゲーム感覚で楽しみながら利用できる

「お金では買えない価値を見える化するのが『まちのコイン』です。サステナブルな地域づくりに貢献したいという思いから、2020年に正式にこのサービスを立ち上げました。当社はゲームやアプリの会社なので、ゲーム感覚で手軽に利用できることを大切にしています」（面白法人カヤック／長谷川裕子さん）

導入の目的は地域ごとにさまざま。カヤックの拠点である鎌倉では「クルッポ」という名称で地域のSDGs関連事業として導入されており、それぞれのスポットが提供するサービスがSDGsのどの項目に該当するかを番号でわかりやすく示すといった取組も行われている。そのほか、地域の商店街やカルチャーの活性化、観光の促進のために導入している地域などもあるが、このサービスの本質として共通しているのは「人と人とのつながり」を大切にしていることだ。

「『まちのコイン』は初めてのお店を利用したり、お店の人と親しくなったりするきっかけにもなっています。また、例えば、高齢者や就労ビザがない難民の方と地域の人々がつながるきっかけになった例もあります。『まちのコイン』が使われた数が多い新しい幸せの指標になればいいなと思っています」



面白法人カヤック
ちいき資本主義事業部
事業部長
長谷川裕子さん

